池田觀纂輯

小學脩身新篇

初等科

卷三

176
4
168

東京新

大日本教育會書籍館

一八函
二架
二八號
一一册

K11C.1
9
3

福羽美静校閲
池田　觀纂輯

初等科卷之三

小學脩身新篇

版權所有

東崖堂刊行

小學脩身新篇　卷之三

福羽美静校閲
池田　觀纂輯

第八章

○師ハ。あらざれど知らず。國語

○學ぶ者ハ。必師を求むること

を慎まざるべからず。程伊川

○學問の道は他なし。其放心を求むるのみ。孟子

○學を勉むるは。書を讀むを以て本とす。五種遺記

○學問は山に登るが如し。急たまへば。日日に下る。靜寄雜録

○千里の行も足下に始む。老子

○光陰を惜むべし。逝水の如し。宋顔之推

○身を立つるは。學を勉むるを以て先とす。五種遺記

○書を讀むこと。百遍ふるとも。其義自ら通ず。童蒙須知

○學問は。志を立つるを本とす。貝原厚信

○志あるものは。事竟ふなる。光武帝

○玉琢かざれば。器を成さず。

人學ばざれば。道を知らず。禮記

○獨り學んで。友なければ。孤陋ふして。問ふこと寡し。學記

○時過ぎて。後に學べば。苦しみて成り難し。禮記

○人の德義と。才智を益をそ。

學問ふあり。　靜寄雜録

○事ハ勉强ふあるのみ。　董仲舒

○人當に有用の學をふをべし。無用の學を爲をべからず。　大和俗訓

○人みな幸を得んとならば人事をつとめよ。　平家物語

○良田萬頃も一藝の身ふあるに如かず。　願體集

○父母師友の敬戒も務めて守るべし。　杏翁醉話

○自ら敬をもとべ。人も亦己を敬す。　讀書録

○自ら慢ずれば。人も亦己を慢ず。讀書録

○吾能に矜るも恥ふり。吾不能を飾るも。亦恥なり。畜德録

○名を成すは。毎に窮苦の日ふあり。

○事を敗るは。多く得意の時に因る。傳家寶

○心に望れこれで困窮した時を。思ひいだすべし。杏翁醉話

○君子ハ。其能くする所を以て。人を病ましめず。

人の能くせざる所を以て人を愧かしめず。禮記

○前車の覆るを後車の戒めなり。賈誼新書

第九章

○分別を堪忍にあると知るべし。杏翁醉話

○人として一言も惡しき事を語るべからず。藤原小黒麿

○善き人を親み惡しき人を疎め。大江公資母相模

○過ちて善く改むるを善の

大なるものふり。孝經

○誠い。人の心の主とすべし。貝原篤信

○敬をきわ徳聚り。敬せざれば散ず。朱熹

○徳と善を積むにあり。禍ひい。惡を積むふあり。三略記

○人を敬ひて。節に過たるも。其過ち大ならず。我位より。傲きるい。其過ち大ふり。大和俗訓

○人誰か過ちなからん。過ちてよく改めむ。善これより大

なるはなし。左氏傳

○善人を見て。之に倣ひ。不善人を見て。之を改む。善と。不善と。みな吾師ぞ。傳家寶

○人い廉潔ぶして。正直なるべし。都鄙問答

○豹死して皮を留め。人死して名を留む。梁王元章

○無道を行ふべからず。聖德太子

○奢りも。長ずべからず。欲は。縱まにもべからず。曲禮

○節を制し。度を謹めば。滿ちて溢れず。孝經

○禍福は門なし。唯人の招く所なり。左氏傳

○身を謹み。用を節して以て父母を養ふ。孝經

○人遠き慮りなき時は。必近き憂へあり。論語

○堪忍は。無事長久の基ひふり。怒りは敵と思へ。杏翁醉話

○學を好むは。知に近し。恥を知るは。勇に近し。中庸

○人の過ちを吾心ふ之を知るも妄りに口ふ出をべからず。大和俗訓

○人の長ずる所を取り短き所を言はず。大和俗訓

○君子ハ人の善を揭げて人の惡を隱す。大和俗訓

○耻を知るものを長して勇あり。櫻井書

第十章

○人徒に一生を過ぐるを禽獸ふ同し。貝原篤信

○人菜根を咬み得るものすくなし。明汪信民

○言に戯れふければ人自ら懼るゝなり。貝原篤信

○博く之を學び審かに之を問ひ慎みて之を思ひ明かふ之を辨まへ篤く之を行ふ。中庸

○凡そ人善を好まざるはなし是を好まゞ學問して道理を知るべし。大和俗訓

○其道を明かにして其功を計らず。董仲舒

○己を責めて人をせむることなかれ。杏翁醉話

○言語慎まざれば殃をまねく。民家童蒙解

○禍ひは口より起りて大ふ及ぶ。護良親王

○大人の學ハ道の為ふす。小人の學も私の為にす。揚子

○善を為す者ハ天報ゆるに福ひを以てす。前漢書

○我身オありとも誇るべからず。貝原篤信

○書を熟讀せざるべ。用ふたちがたし。省僧録

○書を讀むに。精熟を貴びて。多を貪るを貴ばず。初學知要

○己に如かざる者を。友とすることなかれ。論語

○人をあなどるは。仁ふり。人を敬するは。禮なり。貝原篤信

○人の鏡となれ。人の戒とふるるかなり。聖諭

○慈悲は。一生の祈禱なり。德川光國

○志立たざるは。天下成るべ

きの事ふし。王陽明

○志を立つるは。恥を知るを要とす。言志録

○精神一たび。到れば。何事か成らざらん。朱熹

○德を博く。人を愛するより。

高きはなし。賈誼新書

○毫釐の差と。千里の差とふる。故に君子は。始を慎む。上同

○士道ふ志し。惡衣惡食を恥るものい。未たともに議るふ足らざるなり。論語

○人を識まで。即自ら誹るふり。傳家寶

○謙なれば。自ら恭敬の心を存す。素餐録

○奢は長じ易し。つゝしむべし。都鄙問答

○人驕まば。志昏し。志昏ければ。計こゝ短かし。傳家寶

○人惰りて。侈まば貧し。力めて儉ふれば富む。管子

○人一たび。遊惰の念を生ずれば。其心蕩して。學退く。省僉録

○智者ハ言を慎み行ひを慎みて身の福ひとなす。賈誼新書

玉木愛石書

小學脩身新篇巻之三終

附録禮法生徒心得

父母に對しては色を和らげ氣を下し温和を主とすべし。

先生長者我家ふ來りて歸らるゝ時ハ送りて門戸に至り禮をなすべし。

長者ふ對し禮辭を述べぞして室ふいるなど粗暴の事をふるべからず。故を告げぞして激笑をづからず。

朋友の家ふありて遊ぶふも食時ふ及ぶ必辭して歸るべし。

女児ハ柔和にして別して辭ばつかひるゞやさしくをづ。

女児も殊ふ衣服を正しく着け頭髪ふゞ亂れざる樣ふ心ゞくづ。

人の家にては行儀を正しくし奔馳喧噪して戯るべからず。

人を識まゞ人亦吾を識るふ至る慎むづ。

座上ふ置きたる器物ハ跨き踰ゆづの〳〵ず。

戸障子ハ跪きて静ふ開閉をづし。

戸障子壁等ふ字を書くべからず。

席ふも墨を汚をべからず。

爐邊に坐しては火を弄ぶづの〳〵び。

股を開き足を伸ぶるハ不恭なり。

何をふても坐上の器物或ハ飾花の類ふ手を觸るべからず。

他人の書籍帳簿なゞ猥りふ披き見るづからび。

他人より信書を托せらるゝ時ハ遲緩なく届くづし。其封等を猥りふすべからぞ。

席ふつき長者と座をする時ハ下席につくづし。また飲食をする時も必長者ふ後るづ。

附録禮法生徒心得 終

明治十五年九月廿九日版權免許
同　十六年四月　出版

編輯人　福井縣士族　池田觀
大阪府東區常磐町二十番地寄留

出版人　岐阜縣平民　山岸彌平
同府同區北濱三町目五十五番地寄留

發兌書肆
東京日橋區桶町　東崖堂
大阪東區北濱三町目　東崖堂
岐阜縣岐阜西材木町　東崖堂

池田觀纂輯

小學脩身新篇

初等科

卷四

176
4
168

東京行

大日本教育會書籍館

一八函
二架
二八號
一一册

西京分館

K110.1
9
4